運動部活動について

県教委体育課長
菊地俊二

お年寄りが、何処の空地でもゲートボールに興じ、朝夕には、老若を問わずジョギング姿を見かける。日曜ともなれば、リュックを背に、汗しながら山野を歩く人々、ママさんバレーの大会や少年団の各種大会も、益々盛況に成るばかりで、校庭、施設、広場はスポーツ一色である。健康増進、体力向上、生甲斐づくり、余暇活動、交流や気分転換等々目的は様々である。

ひと昔前に主流であった学校の体育・スポーツが、やゝ押され気味な感じさえ受ける。これは、社会的な背景によって、国民全体のニーズが大きく変ったことを示すもので、臨教審の答申に提言されている「生涯学習体系への移行」に結びつく現象であり、体育・スポーツ面における生涯化への明確な現実の姿でもある。学校での体育・スポーツが、より一層生涯体育・健康スポーツを志向して、これを重要視していく必要性を訴えているものである。

昭和六十三年度（小・中学校）及び六十四年度（高校）に告示される新しい学習指導要領でも、学校体育は生涯スポーツの基盤としての役割を担うことが、現行よりも更に強調されるであろう。

ご存知のように、本県は全国に先駆けて「スポーツ県」の宣言（昭和五十三年六月・議決）がなされ、その重要性が叫ばれている。県としても、「スポーツ県群馬推進マスタープラン」を策定し、スポーツの振興を図るとともに、より健康で明るい豊かな生活の実現に向けて、生涯スポーツの振興と競技力の向上を柱として、諸施策を進めているところである。

その中に於いても、学校体育の果すべき役割は、誠に重要なものがある。

二十一世紀を担うに相応しい知・徳・体の調和のとれた、粘り強くたくましい、思いやりの心に満ちた、人間性豊かな青少年の育成を願うとき、従来にも増して運動部活動に対する期待も大きい。

答申でも、社会における都市化の進展は、人のつながりを失い、核家族化の傾向が強く、豊かさ、便利さは心身の健康に大きな問題を投げかけ、人間の精神的・身体的能力の退行、自我の形成の遅れや連帯意識・責任感の低下等の危険があることを指摘している。

特に、経済の著しい発展に伴う「豊かさ」は、意欲や積極性に対する弊害だけでなく、感動や情緒等、人の心にも大きな問題を生じさせている。「甘え」や「ひ弱さ」は、豊かな時代の産物であり、一度身につけたぜい肉は、なかなか落せないものであるので警鐘を鳴らすと同時に、運動部活動の一層の振興と充実を強調したい。

健康でありたい、若さを保ちたい、体力があり、自分の思いどおり身体を動かし、充実した生活を送りたいとは誰もが願うことである。この未来永劫とも言える願望を、叶えるための基礎作りは、心身ともに柔軟で、順応性に富んでいる年令のうちに鍛え、経験しておくことが肝要である。

運動部活動は、本人の興味・関心により、自発的な意志が尊重されて個人の能力の伸長をねらいとし、同好の有志が集って活動するものであり、運動そのものの楽しさを味う魅力と共に、他では得難い宝物が山積されていると言えよう。自分自身を高め、円満な人間関係や友情を育くみ、厳しさ、苦しさを克服する体力や気力を身につけ、思いやりや規律ある生活習慣を育成したり、豊かな心等々枚挙に暇がない。自分自身の心にある「甘え」や「ひ弱さ」を取り除く場として、最適の条件を備えている。

教育改革という絶好の節目に、もう一度部活動を見直し、目的や内容を再検討して、より意義ある教育活動となるように力強く大きく充実、発展させたいものである。

学校時代に、スポーツを楽しみ情熱を燃やすこと自体も素晴らしい事と思うが、唯一無二の体と心を鍛え、作りあげておくことは、一生の宝となるであろう。

高崎高校各運動部の活躍を、心から祈念するとともに、文武両道の実現に向けて、精進願いたい。

頑張れ　高々!!

（52回・バレー部）

初心の人 二つの矢を持つ事なかれ

学校長
磯貝福七

翠巒体育会の会員諸兄におかれましては、本校の体育活動振興のため、不断の御尽瘁を賜り、心より感謝申し上げます。お陰様にて本校も目出度く創立九十周年を寿ぎ、百周年に向っての第一歩を進めることとなりました。これも一重に会員の皆様の温情あふるる御支援があったればこそと厚く御礼申し上げます。

さて、この度、「翠巒体育」に紙幅をいただきましたので、平素の所懐の一端を申し述べまして、会員諸賢の一層の御理解と御協力をお願いいたしたいと存じます。

過日、「徒然草」を繙いておりましたところ、その「第九十二段」に、次のような警句を見出しました。

初心の人二つの矢を持つ事なかれ。後の矢をたのみて、始めの矢に等閑(なおざり)の心あり。毎度ただ得失なく、此の一矢に定むべしと思へ。

この言葉は、ある人が弓を習う時に、その師匠が、初心者の心得として語った言葉であります。当りはずれなど気にせず、雑念を払って、一本の矢に集中せよということでありましょう。兼好法師は、この弓の師の言葉に解説を加えたあと、「此の戒め、萬事にわたるべし。」と言っております。

私はここに、「集中力の大切さ」を読み取りたいと思うのであります。今、この一瞬が二度とない一瞬であることを、われわれは観念としては、誠によく知っております。しかしながら、心の奥のどこかで、二本目の矢が――次の一瞬がまだ残っているという甘い期待を抱いているのではないでしょうか。このような甘い期待を、われわれの心の奥底から追い払うことは、実に困難なことであります。古来日本では、宗教も武道もこの一瞬の獲得のために存在したと申しても過言ではないと思います。

ところで、現代社会において、われわれに、この「一瞬」を捕えるべき「集中力」を教えてくれるものは何でありましょうか。私は、スポーツこそその最良の教師であると信じているのであります。白熱する試合の中で、得点をあげることのできる好機は、そう何度もあるものではありません。どちらのチームが、より強い集中力で、その一瞬を我がものとするか、それが勝敗の別れ目であろうと思うのであります。

今日も高高生は、陽光の中、元気に運動をしております。スポーツを通じて鍛えられ、体に汗して身につけた集中力は、生徒にとって、必ずや生涯の宝となるものであります。二十一世紀のトーチベアラーたる高高生は、押し寄せる国際化・情報化の波に、真向から挑んでゆかねばなりません。「文武両道」が、高高生の眼目となるべき所以であります。九十周年記念事業の一環として、先輩諸兄の御援助で新装なった翠巒会館は、今や彼等の良き道場となっていることを、御報告申し上げたいと思います。

筆を擱くにあたり、会員各位のますますの御健勝と御活躍を祈念いたします。

（昭和六十三年六月）

翠巒体育会 事業報告

62・4・21　創立九十周年記念事業出席
4・27　役員会議（ポルシェ）
4・27　新入生歓迎会出席、入部のすすめ配布
6・1　編集会議（御園寿し）
6・　関東大会出場選手激励
6・23　総会及びゴルフ大会（ビューホテル・安中太平洋クラブ）
11・24　役員会（佐田建設）
63・2・19　〃（亀満）
3・15　編集会議（佐田建設）
4・6　役員会（佐田建設）
5・10　編集会議（佐田建設）
8・22　〃（〃）
8・30　〃（〃）
9・1　理事会（ホテルスワ）

文・武に情を加えた教育を

同窓会長
柴山　大五郎

今年はソウルのオリンピックの年である。この原稿が印刷に廻される時分に、ソウルは世界中の注目を集めているであろう。今回は前回と異なり、東西の両陣営が「壁を超えて」十二年振りに顔をそろえ、百六十一カ国が参加して、繰り広げる史上最大のオリンピックである。

韓国は「葛藤と混沌の壁を超え、大和合の明日に向かおう」をテーマにして、世界の若人が力と技を競うイベントである。わが国からは三百三十七人の若人が参加する。力を何処まで世界に示せるか気に掛るところである。選手団長の柴田勝治日本オリンピック委員会委員長はロスアンゼルスと同数の金メダル十個を目標にしているそうである。しかし、各国の選手が相当力を伸ばしているようで、前回の成績はなかなか困難であろう。一に選手の健闘を祈るのみである。戦前は水泳がわが国のお家藝であった。戦後は体操に移り、柔道に替わって来た。卓球やバレーボールの強い時もあった。

さて、九月十七日にいよいよ開幕になる。新聞や雑誌が予想を含めて、賑やかに報道し、テレビが中継を始めると最高潮に達する、一喜一憂するのは私ばかりではあるまい。

翠巒体育会会長岩田武雄氏から原稿の依頼があった。オリンピックの年に翠巒体育に拙文が掲載されることは嬉しい。母校高々のスポーツ振興にご尽力賜る体育会の役員・会員に心から敬意を表する次第である。

母校は磯貝校長を中心に、「文武両道」、「質実剛健」の二大目標を高く掲げて、日夜ご努力を続けられている。文武両道を両立させることは難しい。これを両立させるべくご尽力するところに、翠巒体育会の存立の意義がある。会員諸兄のご奮起をお祈りする次第である。

わが国は武より文を兎角尊重する風習がある。これは間違いで共に大切である。私はこの二つにもう一つ情操教育を加えたい。社会が情操教育を軽視したら、世の中は味気ない。人生も侘しい物になる。戦前のわが国の教育は情操教育を軽蔑した。私は小学校三年生以後音楽は習わなかった。私が特別であったか知れないが、唱歌は女子が習うもので、男子は女女しいと称し、その替り体操であった。

人は十人十色と言うが、人それぞれ生まれながらにして、異なった個性を持っている。社会は色々の個性の人が集まって、相寄り・相助けて円満な社会を構成している。そして、社会は社会の為になる人、有能な人、人から尊敬される人を必要とし、尊重する。これらを備えた人がリーダーにもなる。学校教育は正しく、社会に有用な人、活躍出来る人を教育することである。学業の成績にのみとらわれないで、文・武・情を適当に配分し、教育して、社会に貢献出来る人を教育すべきである。

わが母校高々は福田・中曽根と言う傑出した二人の総理大臣を続けて輩出した。その他先輩にも多くの有能な人がいる。多感な人間形成に最も大切な時期に、わが高々の学び舎が大いに力があったと誇らしく思う次第である。

九十周年記念事業として翠巒会館の整備も完了した。これを大いに活用して、スポーツに励んでもらいたい。殊に運動部の諸君は力と技を磨き、思い残すことの無いよう頑張って頂きたい。

体育会員諸兄、よきOBとして後輩の指導に、また、崇高な責務をお認めの上、会の発展に尽くされることをお願いします。

（32回）

翠巒体育会　会計報告

昭和62年度

会計　阿久沢　茂（69回・サッカー部）
監査　東　秀和（51回・応援部）
監査　大須賀　正臣（57回・陸上部）

（単位：円）

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
繰越金	776,090	90周年記念事業寄附	200,000
年会費	275,000	会議費	74,290
総会費	132,000	事務費	176,110
雑収入	30,000	総会費	280,560
同窓会より助成金	300,000	会報9号	350,000
		ゴルフ補助金	41,000
		東関大会銭別	30,000
		慶弔費	10,500
合計	1,513,090	合計	1,162,460

次年度繰越金　350,630円

高々体操部と私

角田吉弘

先日、翠巒体育会々長岩田君が拙宅へ来てくれて、高々体操部が、顧問森田忠義君の県体育課への転出を機に廃部となったので何か書く様にと言われ、翠巒体育と九十周年小史を見せてくれた。そこで翌日高々へお邪魔して同窓会員名簿を戴き、これ等を資料として朧気な記憶を辿ることにした。

高中体操部の生みの親富田俊一先生は大正十五年本校にご赴任とあるから、それは私が四歳の時で、草創の昔を見る思いである。

昭和十年、明治神宮大会に体操部、庭球部、射撃部が出場とあるのを考えてみると、皆て群大教授（数学）林静夫さんが、高中体操部は俺達が作ったんだぜと聞かされていたので、その頃の方の卒業年次を調べて見ると、昭和十三年有賀長明・十四年林静夫・清水幸正（群大教授教育学）・十五年有賀長道・十七年木下隆美の諸氏と続いて居て成る程と思ったが、そのあまりの秀才揃いなのにも驚いた。

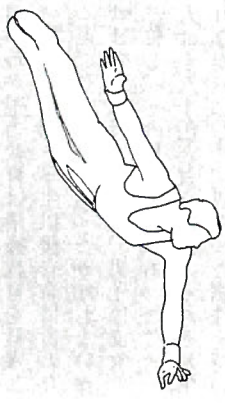
昔はライバル校の生徒達が仲良く互いに訪問したりされたりしていたらしくて、私が多分群師二年（昭十三）の頃、上級生に連れられて高中に遊びに行った事がある。その時、富田先生に生菓子のご馳走にあずかったが、当時は先生から物を戴く事などぼっとにも無かったので大変感激したものだった。校庭へ出て見ると、白ズボンとランニングシャツがはち切れそうな筋肉マンの有賀さんが、十人位の部員達とフープ（鉄の輪の中に入ってそれを両手両足で回転させ、前進後退や蛇行等をする航空兵の訓練器具）を楽しんでいた。先生はいつもにこ〳〵と笑みを浮かべ、生徒達の成長を楽しんでいるように見えた…。その生徒等は又「先生はあの歳で、今でも車輪を回って見せるんだぜ」とか、「先生の声は校庭の端から端まで聞こえるんだぜ」などと言ったりして、先生を誇りにし敬愛している風であった。

次に訪問したのは多分四年の時だった。迎えてくれたのは木下君他の面々で、木下君はネックスプリングの構えの姿勢からスッと伸ばして倒立へ持って行く運動を何回も連続してやって見せてくれた。今になって思えば、これは実に良いトレーニングの一つであったのだ。

そんな事のあった年の秋、我々群師の運動会には木下君が部員を引き連れ、高商の荒瀬君をも誘って、体操部の模範演技の応援に来てくれた。

翌十七年二月、私が東京高師体育科の受験に行くと、木下君も来ていて結果は二人共受かったが、彼は横浜高商の方へ進んだ。

昭和二十一年、私は高師を卒業すると縁あって高中へ奉職する事が出来た。そこには尊敬する富田先生や、兄の様な清水先生や金井先生がおられて、随分我が儘をした私をいつもライオンの母親の様に遠くから温かく見守っていて下さった。



昭和62～63年度 高々運動部活動状況

◇ラグビー部

第22回県総体
高々68－0桐高（2回戦）
高々25－0藤高（3回戦）
高々7－16中央（準決勝）

第35回関東大会
高々14－8並木高（茨城）
高々7－9日大二（東京）

インターハイ予選
高々25－6県央
高々104－0渋西
高々44－0渋川

（決勝トーナメント）
高々6－6高商（抽勝）
高々3－6前商

第23回県総体
高々16－10太工（2回戦）
高々0－12前高（3回戦）

◇弓道部

西毛地区大会
団体　2位
個人　木暮友伸　1位

秋季大会
個人　木暮友伸　3位
（関東大会出場）

春季大会
個人　木暮友伸　3位

第23回県総体
団体決勝（24射10中）
高他・神宮・木暮

そのお蔭で毎日八時、九時頃まで生徒達のコーチをする事が出来た。

その頃の部員は、二十二年卒森良一（日本歯大）、柳沢英治（日大・米ローヤル大）、清水真澄（中央大）山崎啓司（東農大）静野寛（群大）君達であったが、練習には高陽中、高工、高商、時には藤岡からもやって来て賑やかであった。

そうした事が良かったのか、第二回の国体には高中森良一・高陽反町豊・千木良選手・高商植松利夫・高工篠田強固の五名の健闘により、見事団体優勝をする事が出来た。

その後私は、家事に追われてあまり練習が見られなかったが、二十七年卒田中佐佶（群大）、田島桂男（群大）、真木昭（立大）、石川東（明大）君達は私の見られない日にも良く練習して、その共同戦線は、全国高校体操会にその覇を譲らぬ高校体操部の名監督田中佐佶君を生んだのである。

昭和二十七年九月から二十九年三月まで私の高工勤務の間、富田先生は体操部の衰退を心配なされて、三十一年卒丸山堅二君（日本歯大）にその火を絶やさぬようにと計らって下さったのだそうで、その意義に感じて集まってくれたのが春原武君、藤牧忠平君、三十三年卒中原茂君（東京商船大）であった。

そうこうして命脈を保ったお蔭で、三十五年度卒には高井康美君（国体出場・東教大）、森田忠義君（東教大・現在県体育課）の俊雄を産む事が出来た。

三十七年卒組は、特に秀才揃いで輝いた感じがする。高橋直樹君（電通大）、小林正通君（新潟大工）、小谷雅春君（日大工）、千葉博彦君（明大）、それに石井溥君は一年の時アメリカンフィールドサービスに行って来て、卒業時には東大理二に合格している。

三十八年度卒では、東教大体育を卒業し現在スポーツドクターの称号を持ち、アメリカにあって体育科学を研究している武井義明君を出している。

以上のように過去を振り返ってみると、富田先生ご着任以来、又体操部発足以来、高々体操部とは、終始一貫して富田先生がご退任なさった後々までも、いつも先生の息吹きが掛かっていた事を感ずる。又どの年次をみても、部員の皆がみな学業成績が優秀で、顧問は其の事で心配したという事が全く無かった不思議な部であった事である。

近年世の進展と共に体操界も、国の内外を問わずその技術的競争が熾烈になってきており、動もすれば人間形成の面や世界平和等の社会的徳性の涵養に心配を感ずるような昨今であるが、斯うした情勢の中にあって高々体操部がピリオドを打った事は正解であったと思う。特に此の晩年を守って健闘した高井君や森田君達に、「良くぞその時点までやってくれた」と感謝の言葉を贈りたい。

富田先生の全員和楽・全校和楽・世界和楽の精神を代々の高々生全員が捧持して、その実現へ努力されるよう祈ります。

昭和62～63年度 高々運動部活動状況

◇スキー部

第23回関東大会
〈RS〉・50位　村田和亮
　　・110位　丸山哲夫

第15回県新人大会　兼
第19回武尊杯争奪スキー大会
〈SL〉・18位　村田和亮
　　・19位　丸山哲夫
〈RS〉・18位　村田和亮
　　・〃　平野俊哉
　　・30位　沼野藤雅

第16回県春季スキー選手権
〈SL〉・15位　平野淳哉
　　・24位　丸山哲夫
　　・26位　金沢　真
　　・27位　沼野藤雅
　　・30位　岩崎　稔
〈RS〉・22位　村田和亮
　　・30位　平野俊哉
　　・34位　丸山哲夫
　　・38位　平野淳哉

◇バスケット部

第23回県総体
高々93（47－17、46－13）30勢多農
（一回戦）
高々39（19－24、20－21）45前橋西
（2回戦）

青春の絆

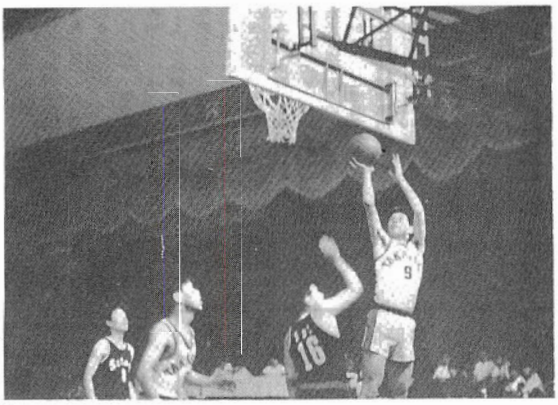
――バスケット部――

バスケット部OB会の青春の絆

反町定夫（50回）

「青春の絆」という表題で原稿を依頼されたが、元来、筆まめでない小生には少々荷が重すぎるが思うところを雑記したい。

「バスケットボール部OB会の青春の絆とは」と考えてみた。「OB会の会長の俺」でもない「OB会諸兄のまとまりの良い事」かと思ったが、しかし、それでもないと考えていた矢先に恩師・清水貞保先生が県の功労賞を受賞したとの一報が耳に入って来た。やはり「OB会の絆はポテさんだ」とこの時思った。若いOB諸兄は別として、七〇%近いOB連中は「ポテさん」に世話になり、現在の社会人としての人間的な基礎が形成されたことに異論を唱える奴はいないであろう。そうだ、若いOB連中だって「ポテさん」の教え子である鈴木先生・川島先生に世話になったのだから、OB全員が多かれ少なかれ「ポテさん」の影響を受けていることになるのである。やはり、「ポテさんがバスケット部OB会の青春の絆である。」



清水先生も高齢となり、数年前に愛妻を失なわれた現在の楽しみは何んであろうか？　我々教え子達に会うのも楽しみの一つに違いない。何故かと云うと、先生は毎年行われる六九会、二年毎に開かれるファミリー会にも必ず出席してくれる。その時は実に楽しそうに我々に話し掛けてくれるからである。先生は今年は満七十五歳になられ、「喜寿の祝」まであと二年である。その時には盛大にOB会で祝ってさしあげたいと俺は考えている。

OB諸兄よ、OB会の集りがあるときには出掛けて来て一人でも多くの顔を清水先生に見せてやってもらいたい。それが我がバスケット部OB会の絆である清水先生が、いつまでも健康で丈夫でいられる礎となるからである。

バスケットボールが人生を決めた

小澤武男（57回）

私がバスケットボールと出会ったのは小学六年生の時であった。すぐ上の兄が高崎二中でバスケットをやっており、ある日、学校よりボールを家に持ち帰り私にパスとドリブルのやり方を教えたのが出会いであった。私は当時、少年野球をやっており、バスケットボールという球技があることも知らなかったが、これが切っ掛けとなり中学校入学と同時にバスケットを始めたわけである。当時の二中は高崎市の大会で優勝し、県大会でも優勝候補の筆頭であったが県大会では宮城中に一回戦で敗れた。その二中のコーチは清水貞保先生のご紹介で当時、群大生であった鈴木武文先生（現県バスケットボール協会理事長）と田中忠義先生でありました。私は一年生でもあり両先生方に直接ご指導を受けられる立場ではありませんでしたが、これが縁で高々バスケットボール部に関心を持ち始め、よく高々の試合を見学に行きそのプレイの素晴しさに感銘を受け、幼な心に高等学校に行くなら高々でバスケットをやりたいと思って居たものでした。この時代の高々は北関東大会で三連覇するなど黄金時代でもありましたが、三年後に私が憧れの高々へ入学しバスケット部に入部した昭和三十一年には二、三年生部員が三名で我々新入生が入部してやっとチーム編成が出来たという状況であり、チーム力は県下でベスト8に入れるかどうかというところまで落ちてしまい、我々新入生が三年生になるまでに県下ナンバーワンの地位に復活させるのがOB諸兄の念願であったと聞いております。当時の高々のコーチをやって我々を指導して戴きまし

たのが岩田武雄会長であり、岩田先輩のもと連日の猛練習の成果の甲斐があって三年生のインターハイ県大会で優勝し全国大会に出場でき、その後も高々OBチームの一員として国体にも連れて行って戴き誠に恵まれた青春時代でありました。ただ、我々のこの時代は我が国の経済が発展途上であり、用具・設備等はまことに粗末なもので、ボールは使用出来るものは三つ四つ、それも体育館の床が悪いためすぐに汚れて悪くなるし、シューズは個人では購入出来ないほど高価で、試合用のユニホームも数年前のものを着用し、私などはユニホームの文字が剝げパンツは継ぎ当てがしてあるものを着用し、それでも伝統のユニホームに誇りをもって戦いました。勿論、今流行の学校名の入ったトレーニングウエアなどはとても手に出来ない状況で、全国大会の出場が決定した際にやっと購入して貰ったという時代で現代の子供達には到底理解することが出来ないと思います。しかし、逆に大学受験戦争の波はまだそれほどでもなく、高々生もスポーツに打ち込んでも進学出来たのですから旧き良き時代であったのでしょうか？

私の人生を顧みるに、バスケットがすべての基点となっているのではないかと思います。バスケットに憧れて高々に入学し、大学卒業後はバスケットがやりたくて地元の某会社に入社し、そこで社内結婚し、現在はその女房の実家で義父と一緒に事業をやっているのですから、「バスケットボールが俺の人生を決めた」と云っても過言ではないでしょう。

私のバスケ部時代をふり返って

佐藤　貢（78回）

バスケットボールを私に最初に教えてくれた実兄（高橋行男・高商OBで私より二歳上で高校時代は敵味方で戦った）は昨年の十二月に四十九歳の若さで人生を終わり「あの世」に旅立ってしまった。私はこの兄の冥福を心から祈りつつ執筆を終わります。

私が高々のバスケット部に在籍していたのは昭和51～54年であった。当時のわれわれの対戦成績はバスケット部の歴史においても比較的良かった時代のようだ。我々の仲間にも、こと試合の経過や結果についてはものすごい記憶力を持ち、誰がどの場面でどう得点して何対何で勝ったなどと言える人間がいるが、残念ながら私にはそのような特異(?)な能力を持ち合わせていないので、試合等についてはあまり語れない。

覚えていることと言えば、練習の前や後に校門前の「真下商店」で、ハムカツサンドとチェリオ、冬には一本二十円のおでんを買って食べたことや、合宿の時、夜、「とりせん」まで買い出しに行き、真夜中に「翠巒会館」の台所でインスタントラーメンを作っていて先生に叱られたこと、そして、体育館の中で「カンケリ」のカンの代わりにボールを使ってする「ボールケリ」（これは監督の川島先生が練習に出て来る前にやっていたため必ず下級生が一人見張りとして立たされていた）などである。思うに、当時のわれわれはあまり練習好きなメンバーではなかったし、高校生活の全てをバスケットに懸けるといった熱血少年でもなかった。と言って、スポーツに対し不真面目だったという訳でもなかった。これは、われわれ高々生の最も高々生らしいところであったようにも思う。確かに勝負には強いに越したことはない。だが驕った言い方になるかもしれないが、この文が高々のOBを中心に読まれるということを前提にして書かせてもらうとして、われわれには高々の生徒であるという一種のエリート意識、端的に言えば、われわれは別にスポーツにたよらなくてもその他で自分の能力（たとえば学業で）を発揮することができるという自負があった。このためスポーツに対する執着心が薄かったのかもしれない。

そして、出会った田端先生が、「好きでやっている野球じゃないか、明るくやろう。野球に変な精神主義を持ち込んで選手がガチガチになっているチームがあるでしょう。冗談じゃないっていうの…。たかが野球じゃないの…。」と言っていたのが印象に残っている。この「たかが…」はそれを見放してしまった言い方ではなく、全てに通じてオールマイティになった後の余裕の言葉であると思うし、この「たかが…」の精神こそ我が高々の精神だと思う。

OB会の活動

翠巒体育会

ゴルフ大会

団体は柔道部、個人は沼賀氏

第四回翠巒体育会ゴルフコンペは雲一つない晴天のもとに、総勢五十六人の参加を得て盛大かつ、なごやかのうちに行われました。

水泳部の健闘により初優勝かと思われましたが、最終組の柔道部・沼賀さんの大活躍（グロス70）により大逆転となりました。またしても、柔道部の優勝。結局、柔道部の四連覇に終わりました。

第四回高崎高校翠巒体育会ゴルフ大会（太平洋クラブ高崎コース）（六二・六・二三）

▽団体
①柔道部　グロストータル329
②水泳部　〃　334
③卓球部　〃　340

▽個人
①沼賀勝平　ネット70
②山口正敏　〃　71・2
③庭田登志男　〃　72・8

▽ベスグロ　沼賀勝平　70

水泳部

小茂田　猛（66回）

しばらく集まりのなかったOB会を二月二十日に新年会をかねて行ったところ三十名近い出席をえて、昔話に花を咲かせました。

つづいて、四月十二日にはOB会ゴルフコンペを行い、二組と少ない参加でしたが楽しい一日を過ごしました。

夕刻になって、初代OB会会長・田胡吉明先輩（五十四回）が亡くなった知らせが届き、皆声もでない驚きにつつまれました。長い闘病の末のこと、紙上をかりてご冥福をお祈りしたいと思います。

バスケット部

岩田　武雄（53回）

第十五回バスケット部OB会親睦ゴルフ大会が、八月六日（土曜日）ロイヤルオークCCにて開催されました。

参加人数は十五名とや、少なめでしたが、皆日ごろ鍛えた妙技を披露しての楽しいコンペとなりました。

成績は左記の通りです。

〈優　勝〉　平田英治（四十九期）
〈準優勝〉　細野幹夫（六十九期）
〈三位〉　長野幸国（四十九期）

尚、ゴルフ大会次回開催は、十月二十九日（土）を予定しております。また、定期総会は、その当日か翌日に開く予定でおります。今すぐ手帳に二重丸をお願い致します。

更に、この度、我等が恩師・清水貞保先生が「県政功労賞」を受賞されました。そこで、ゴルフ大会終了後、先生の受賞祝賀会をとり行います。OB諸兄の多数の参加、お待ちしております。

柔道部

東瀬　朝紀（69回）

我々柔道部OB会は、去る五月二十一日、高崎ビューホテルに於て「今井孝造先生を囲む会」を行いました。

高崎高校時代の柔道の師であられます今井先生は、今春富岡高校を最後に教職から去られました。我々OB会は、先生の永年の御苦労に対して謝恩の意を表わすと共に、先生の新たなる人生の出発を祝して、集いを企画しましたところ、ご覧のような盛会となりました。

多感な青春時代、種々御薫陶をいただいた今井先生を囲んでの会は、何歳になっても忘れない青畳の香りが致しました。

陸上部

谷　一行（70回）

発会当初は盛況でしたが、昨年度は残念ながら五年一度の総会も開催出来ませんでした。

年会費未納の方が多く、運営費不足との事ですので、是非とも御協力をお願い致します。

OB会の活動というわけではないのですが、明るいニュースがあります。昭和四十一～昭和五十二年の間、陸上競技部の監督をなさってた小林馨先生が、平沼記念賞（全国の高校の教員の中で優秀な陸上競技指導者に与えられる賞で、年に一度国体会場で表彰されるそうです。）を昨年受賞されたとの事です。おめでとうございます。

以上をもって、OB会近況報告とさせていただきます。

サッカー部

清野　哲雄（74期）

部創立以来、四十九期を筆頭にOB会員は、現在三百五十名を数える様になりました。初代会長五十期・國峯善次郎氏を引き継ぎ、昨年より五十八期・佐藤義夫氏を会長とし、副会長（五名）以下三十歳前後の若いOBを中心に活動しています。

年間の主な活動を紹介しますと、OB会としては、毎年1月2日の初蹴会・総会（本年は新企画として妻子等家族同伴にて出席）：年一～二回のゴルフコンペ：夏季納涼会：現役合宿への応援参加：サッカー部OB会広報の企画：スキーツアーの企画等を行なっています。また、翠巒サッカークラブとしては、群馬県総合選手権（今季第三位）：高崎市広域社会人リーグ：群馬県社会人リーグ：天皇杯選手権（昨季ベスト8）：高崎市市民大会：県民大会市対抗の部：高崎市サッカー協会への協力等、年間二十～三十試合への出場を続けています。また、OB会員の結婚・出産・葬祭等への配慮をしています。

近年の翠巒クラブの成績は著しく飛躍し、メンバー三十三名の所帯となり、社会人リーグ3部からの昇格を期しています。

現役サッカー部を暖かく見守るように若いOB会員には時代性を考え、大きな援助と牽引をしていく様に新企画を組み、三百五十名のつながりの網の和がますます盛んになる様、会長以下役員一同努力しています。

翠巒体育会及び高崎高校卒業生の皆様、胸に「翠巒」のユニフォームを着たサッカー選手を見かけましたら、大きな声援をよろしくお願いします。

野球部

田島　宏樹（57回）

世代超え白熱戦

――OB・現役が追悼試合――

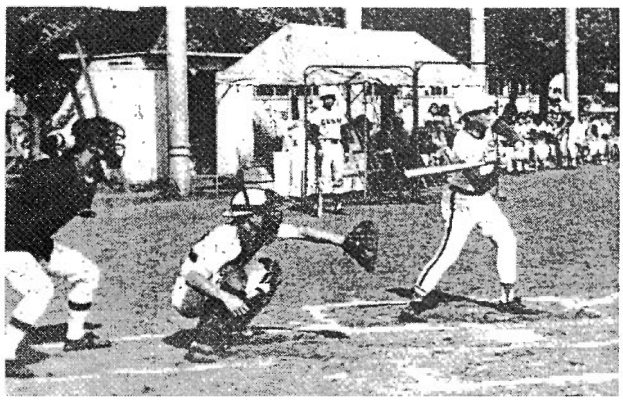
〈十月二十六日　新聞より〉

高崎高校野球部OBと現役部員らによる「高々野球部特別功労者追悼親善試合」が二十六日、同校グラウンドで行われ、往年の名選手と息子ほどの現役選手が秋空の下、世代を超えた白熱した試合を展開した。

同校は来年、九十周年を迎えることから、試合は「一つのけじめとして、野球部活動に尽力のあった人々に感謝の意を伝えたい」とのOBの熱意で実現したもので、三塁側OBベンチには京浜、高崎地区の歴代後援会長四人の遺影が飾られた。

OBたちは硬式から離れている人が多く、序盤は〝にぎり〟に戸惑う姿もみられた。また、巨人軍の〝八時半の男〟宮田征典氏(四七)と高校時代投げ合ったという細谷崇さん(四七)＝同市沖町・医師＝が、三振を奪ってガッツポーズをとるなど参加OB五十人は、気持ちだけはすっかり現役時代に戻っていた。

この日の夜、OBらはターミナルホテルに功労者を招き「感謝の夕べ」を催した。



現役時代にもどって試合するOBら

低迷時代を脱出するための自覚
ラグビー部
佐藤　雅

我が高々ラグビー部は、このところ低迷しつつあり、これではいかんと部員一同、毎日練習に励んでいます。二月の新人戦では、農二に4－32、五月の総体では負けるはずのない前高に0－12と敗れ、部員達は焦りと不安を感じています。

一瞬の判断で勝敗が決まってしまうラグビーでは、闘争心と集中力が重視されなおかつ、冷静さを必要とするスポーツであるので、決して長いとはいえぬ練習時間で、いかにこれらのことを意識して練習にとり組めるかが今後の課題であり、精神的な弱さを克服しないかぎり、勝利への道は切り開いてはゆけないのです。さらに現在の部員数は三十八人という少人数であるので、顧問の先生方、OBの方々の御配慮に深く感謝すると共に、伝統と実績ある高々ラグビー部の一員だということをもっと自覚する必要があります。それと共に、我々はラグビーを通しての友情を大切にしていかなければなりません。

こういったことを踏まえ、秋に農二を破るために、一層努力することを誓います。

自己との闘い
弓道部
鍋岡　崇

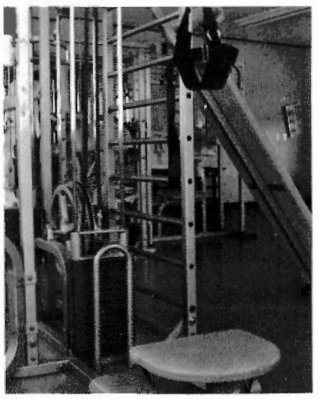
高々弓道部は部に昇格して以来、部員数が一気に増え、県下の他校と比べても人数だけでは上位に入ることができます。しかし、その成績は？といえば、決して親指を立てて笑うことができないのが団体戦においてです。ここ二年ほどの大きな大会では全て入賞が果たせていません。どうしてか？たぶん、日頃の練習における各自の「やる気と自覚」の足りなさに問題があると思います。集合時間にルーズであったり、練習中にどこかのオバサン連中のようにペチャクチャしていたりということが稀ではないのです。確かに練習における試合形式の競射では、絶対に入賞できるほどの的中が出ます。しかしそれはあくまで練習においてであって、本試合独特の緊張感、焦燥感になじむものではありません。

こうに裏話を書くと、読んでいる方にどうしようもない部活だと思われてしまうかも知れないので裏話はやめよう。我々は普段は毎日活動し、城南市営弓道場で顧問や一般の先生方に射をよく見て頂き、少しでも試合に勝とうと努力をしています。今はインハイ出場を目標に選手たちは頑張っています。

弓道はあくまで自己のさまざまな意思との闘いなので、個人〳〵が「やる時はやる。休む時は休む。」と割りきることができれば、試合でもいい成績が残せるはずです。我々はいつも「あとちょっと」で涙を飲んでしまうので、底力はあるけれど、それが出しきっていない。だから、精神面の鍛練がなくてはならないのです。つまるところ、和弓は心で引いて、心で的中するもの、なのでしょう。

ハイテクスポーツ〝スキー〟
スキー部
村田　和亮

今年はカルガリーオリンピックなどもあり、かなりの人がスキーに関心を寄せた年であったと思います。オリンピックなどを見ても最近はウェアやスキーなどとてもカラフルになってきています。またカラフルになっただけでなく、毎年新素材が開発されスキーのマテリアルなどに使用されています。このように今やスキーはハイテクを駆使したスポーツとなってきているのです。



しかし、そのようなマテリアルの機能を最大限に発揮するにはやはりそれなりの技術や体力が必要となってくるわけです。そのために夏のトレーニングがとても重要でかかせません。また、冬にはラビットポールを使い練習しています。このラビットポールは滑りながら払いのけていく感じになるのですが、これには手、肩、ストック、足などを使いわけながら滑る技術が必要とされます。そのため、これらの技術を身につけるには先ず第一にできるだけ数多く滑り込まなければなりません。しかし、長野原高校や利根商などの様に滑走日数がシーズンに百日以上などというわけにはいきません。そのため練習の一本一本を確実に集中して滑る様にしなければならないと思います。

とにかく、やるだけのことはやり、関東大会、また、インターハイ出場を目指して頑張ります。

下降から上昇へ
水泳部
吉野　勝寿

ここ数年における水泳競技の飛躍的なレベルの上昇に対し、他校と比較すると練習時間が少ないと思われるわが水泳部にとって、以前のような好成績を上げるのは大変難しい状態となってきている。当然練習時間を増やし、レベルを上げていくことが望ましいのだが、学業との兼ね合いもあって、あまり多くの練習時間をとることもできないので、練習の質を高めることでレベルを上げていこうと考えている。そこでシーズン・オフには、ランニングや筋力トレーニングを充実させシーズンが始まってからも、体力づくりの一環としてこれらを適度に織り込んでいき、また、シーズン中の泳ぎの練習の面でも、サークルなどを短縮してピッチを上げた練習を行い、定期的に記録会なども開いて練習内容を充実させていこうと考えている。

また、今年は部員の数も多幅に増加し部自体、なかなかの活気も出てきている。例年通り大部分が初心者なのだが、かなり有望な選手も入ってきている。初心者に対しては適切な指導をし、少しでも早く大会などで活躍できるようになってもらいたいと考えている。

当面の目標は関東大会出場である。以前の水泳部から見れば大した事ではないかも知れないが、下降から上昇への第一歩として大切にしたいと思っている。

一丸となって
サッカー部
田中　直樹

昨年の六月半ばに先輩方が抜け、サッカー部は僕達を主体とするチームになった。新チームになったとき、顧問の先生に「おまえ達は今までのチームより力が劣っている」というような事を言われた。その時「何を！」と思ったのは僕だけではあるまい。そんな気持ちで新チームは始まった。

新たなチームになってまもなく夏休みに入った。猛暑の中、基礎練習に励んだ。苦しい合宿が終わると夏がすぐに終わり、選手権予選が始まった。初の公式戦で全員力が入っていた。新島に3―1で逆転勝ちし西毛Bグループ1位になったが、Aグループ2位の富岡に2―1で敗れてしまった。その試合ではあせりといらだちでへんなふうに力が入り、気持ちがから回りしてしまった。精神的弱さを痛感した。次の新人戦では一回戦で新島と対戦し負けてしまった。心のどこかにこの前勝ったという安心感のようなものがあったのだろう。県総体でも三回戦で太田東に1―0で敗れてしまった。

ある先輩が抜ける時「俺達、最後バラバラだったからなァ」と嘆いていた。そんな風にならないよう努力してきたが精神的に弱いせいか一つにまとまっていない気がする。後輩には普段の練習から一丸となっていてもらいたい。僕らにとって最後の公式戦であるインターハイでは全員が一つとなって気迫のこもった思い出に残る試合をしたいと思っている。

〝負けん気〟を持って
柔道部
丸橋　信行

「0―4」、これは先日、県総体二回戦対利根商において記録したスコアです。県ベスト8校に対して、全くと言っていい程、手も足も出ませんでした。悔しかったです。どうしょうもなく悔しかったです。しかし、その悔しさは、「あれだけ頑張ったのに、何故勝てないんだ。」という悔しさではなく、気力も集中力もない、明らかになげやりな試合をしてしまった自分が、自分の気持ちが情無かったのです。

自分達は稽古にしても気力不足でした。毎日〳〵与えられたノルマを熟せばハイ終わりの、まるで活気のない稽古をしていました。「進学校だから、短時間に集中してしっかりやろう。」と、わざわざ先生が配慮して下さった、わずか二時間の稽古なのに、密度が濃くなるどころか、逆になあなあに時間を過ごすような事態になってしまっていたのです。そして、その代償がこの惨憺たる結果です。もし、稽古の中で少しでも「集中してやろう。」という気指ちを持っていたならば、こんな中途半端な試合をしてはいなかったでしょう。

自分たちは今、二年生三名、一年生五名の計八名で、三年生はいません。この三年生がいないという所に、大きな甘えがあったのかもしれません。「俺達はまだ二年だから、負けたって仕方ないんだ。」とか、「もう一年あるから、来年頑張りゃいいや。」等といった気持ちが自分達の中にあるのです。こんな気持ちを抱いていたら、三年になっても結果は同じことでしょう。又、こんな気持ちを捨てさらなければ、後この将来にも悪影響を及ぼすに違いないのです。

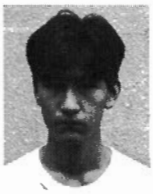
しかし、それが判った今、いや判っていた今でも、正直な所、しっかりとやっていけるという自信を持つことはできません。またいつ何時、甘えが出て、だらけた稽古、生活になるか不安でたまらないのです。でも、そうなった時にはもう一度、自分達を見つめ直し、〝一致団結〟し、「一、二年だから、少数だからって馬鹿にするな。」と〝負けん気〟を奮い起こして、少しずつでも前進していくつもりです、いや、前進していきます。

最後になりましたが、どうかこの未熟な後輩を、温かく、又厳しく見守り、御指導下さるよう、お願い申し上げます。

先輩、頑張ってます

現役の抱負　その2

夢はヒマラヤ
山岳部
吉田　哲也



群馬県には、群馬岳連という世界の最先端をいくかなり凄い団体がある。その中には今年冬期アンナプルナ南壁を成功させた総隊長の八木原さん、登頂した登攀隊長の山田さんなど何人か沼高山岳部OBが入っている。残念なことに我が高々山岳部には、極一部のOBを除いては、ほとんど山から離れてしまっている。OBばかりでなく現役部員もこの頃全然覇気がない。やはり山岳部である以上、低山ハイクや尾瀬の山などのような楽な山ではなくて、山岳部にいなければできないもっと厳しいことをやっていきたい。もちろんそれなりのトレーニングをし、山に多く入り経験を積んでいき、今、高体連の方で冬山や岩など禁止されているが、そんなことにはめげずに、どんどん冬山や岩をやっていかなければだめである。

そしてOBになっても、ずっと山を続け、アルプスやヒマラヤに行けるように頑張っていきたい。

続・「黄金時代」復活を目指して
軟式庭球部
宮田　佳英

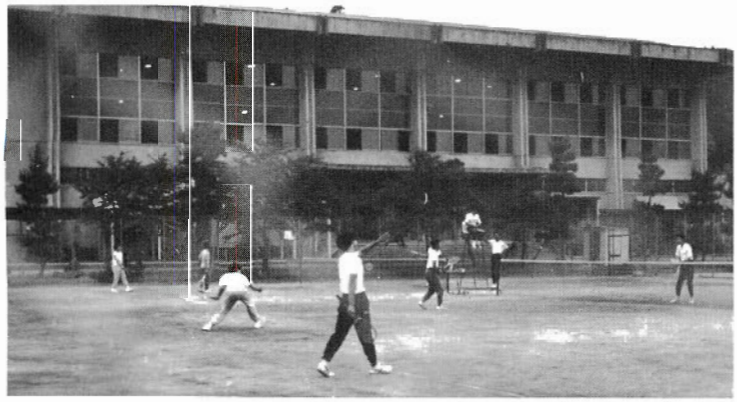
高々軟庭部の「黄金時代」の復活を目指して数年が過ぎ、昨年の春に到るまでに、最も欠けていると感じられていた。、技術指導面における点が、近年になく充実してきていて、部全体の水準が秋までに大きくアップしてきていたように感じられました。

しかし、その技術を受け入れ試合中に存分に発揮するというところまでは到っていなかったようです。それゆえに、昨年の新人戦ベスト4、インドア大会準優勝といった近年にない成績を得られたのも顧問の先生によるところが、大きかったと思われます。ところがシーズンオフの間、この成績に甘んじ練習を怠たり、一番の目標であった総体団体戦での関東大会出場を逃がしてしまい、この時やっと充分にその目標に達すべく力を持っていたのにそれを発揮できなかった精神面の弱さを痛切に感じさせられたのです。

しかし、次の日の個人戦では、前日の教訓を生かし精神面をなんとか克服し、二ペアの関東大会出場を得られたことは後への希望を継いでくれました。

今、関東大会に向けて練習を行っていますが、この大会をステップとし最後の大会となるインターハイ予選団体出場権獲得に最大限努力するしかないのです。

後の二年生には、「黄金時代」復活を成し遂げ、ぜひ「高々軟庭部」の名を上げて欲しいと思います。



今後の目標
陸上競技部
因　直輝

我が陸上競技部は、現在部員総勢四十一名で毎日練習に励んでいます。

一昨年関東大会出場一名、昨年二名とあまりふるいませんでしたが、今年は一一〇MH、一五〇〇M、4×一〇〇MRの三種目の関東大事出場が決まり除々にレベルも向上してきています。またこの他にも各学年とも力のある選手が多数います。そして顧問はかつて十種競技でアジア大会で優勝したこともある岩井寿史先生ですので、すばらしい指導者の下、今後の活躍が期待できると思います。

これからの目標としては、まずなんといっても学校対抗で一部に上がることです。そして駅伝は昨年十位でしたが、今年は戦力的にかなり昨年を上回っているので今年こそは関東大会に出場したいと思います。

練習時間は決して長いとは言えませんが、その中でいかに集中して練習できるかということが大切だと思います。そして学校対抗一部昇格、駅伝関東大会出場という目標を達成できるよう、また高々陸上部の伝統に恥じぬよう今後とも練習に励んでいきたいと思います。

〝強いバスケ部〟復活を
バスケット部
鈴木　徹也

我がバスケット部は、この一年で全盛期からどん底の状態へと変化してしまった。一昨年は関東大会優勝、そして昨年も関東大会出場とまずまずの成績を残していた。しかし新チームとなり、まさかの定期戦敗退、そして部内でちょっとしたトラブルがあり、三年生は私一人残って、皆退部してしまった。そしてそれが〝部の存続〟問題にまで発展して、バスケット部員にとってまさに地獄のような日々が続いた。この間OBの方々にもいろいろ迷惑をかけてしまって、とても申し訳なく思っている。結局、三年一名、二年十一名の計十二名で新たなチームとして活動始めたが、西毛地区大会三位、新人戦二回戦敗退と成績は振わず、とうとう先輩たちが勝ちとったシード権をも失ってしまった。そして先日行われた県総体でも二回戦で敗退してしまった。高々バスケ部にとって屈辱的な一年だった。

今、キャプテンとして、後輩たちに大した指導もできなかったことを残念に思っている。しかしこれから二年生のチームとして、決してこのような惨めな思いをすることなく頑張ってもらいたい。そして、また『強い高々バスケ部』を復活させてくれると信じている。

これからも良き御指導よろしくお願いいたします。

自信をもって試合に
剣道部
小野　欽三

今、自分が主将になってからの一年を考えてみますと、先輩方の合宿中の親切でもあり厳しい御指道をできるだけうまくとり入れた稽古に毎日励んできました。しかし新人戦ではベスト16で終わり、その敗戦で自分たちの試合の不慣れを痛感しました。それから何度か練習試合を重ね、春合宿で先輩方の「攻め」などをはじめ、細かい指導を受け総体に臨みました。その結果、三回戦までは、五人が全員自分の剣道に自信を持って試合することができました。四回戦で農二に敗れベスト4に入ることはできませんでした。しかし、これは贔屓目ですが、実力がないために自信のなかった自分たちが、かなり自分なりの満足がいく試合が、三回戦まではできました。これも、すべて顧問の若い富田先生や、多数の先輩方の御指導によるものだと深く感謝するしだいです。

そしてこれからの課題として、強い学校との練習試合を重ね、その反省を生かした稽古を考えています。その結果後輩達によりよい成績と行動の模範を示し、高々剣道部の全国出場や関東出場への踏台の確立に頑張りたいと思います。

是非、優勝旗を…
野球部
岸　通

我々高崎高校野球部は、小林監督のもと「甲子園出場」という目標に向かって日夜、練習に励んでいる。

小林流野球とは、我校のような選手の体力不足を補うための「緻密野球」「機動力野球」を理論とする。このような野球を目指す練習は、どうしてもチーム全体の練習が長時間を占め、個人的な打撃、ウェイトトレーニング等の練習が短時間になってしまう。そうなるとそれらの時間は、どうしても集中力が要される。この集中力により我校は伝統とも言われる「集中打」を生み出している。

これらの小林流野球で昨年度は三季ともベスト4へと進出した。そして今年度になり、昨年のレギュラーメンバーの半分以上を残し、大きな期待と共に大会に臨んだが、秋季は三回戦、春季は一回戦敗退という屈辱を味わった。敗因は一点を取る執着心、一人一人の勝つことへの意識が欠けていたためであると思われる。それらの欠点は選手各々がやる気と根性を見せれば容易に解決できることだろう。

そして夏へ臨むための練習はもう十分積んできた。あとは選手一人一人が自分の力を信じ、どれだけ熱くなれるかだ。

我々三年生は、小林監督就任と同時に本校へ入学してきたこともあり、今年は是非とも、優勝旗を監督のもとへ飾りたい。

求めること
卓球部
中島　大輔

我々三年生にとっては最後の試合となった総体で、団体はあと一歩というところで館林商工に敗れベスト8進出となら:ずに、ベスト16という結果に終わった。

勝負においては、勝敗は二の次だ。と言う人があるが、（確かにそうなのかもしれないが）それは、勝者が口にするから言葉になるものであって、敗者が口にすればただの負けおしみになってしまう。だからというわけではないが、やはり、私は勝たなければ意味ないと思う。勝者と敗者は、それ以上でもないし、それ以下でもない。

試合における精神面での比重は大きい。「低迷時代」といわれる昨今、この状態を脱するためには、なりふりかまわず勝利へと突進するハングリーな精神が必要なのではあるまいか。と考えるのは、高々の将来を憂える者の戯言だろうか。

真の応援団を目指して
応援部
古川　泰一

翠巒祭の看板でもある、「リーダー公開祭」も近付き、私達応援部の意気もあがり、心身共に気合いを入れて、緊迫した雰囲気の中毎日練習を重ねている。部員の中には腐った根性の者はいないので、「公開祭」の成功は必然である。本校の先輩方には是非、御一見して頂きたい。

また、その後にある野球応援も私達の重要な仕事の一つである。これこそは絶対、生徒会員やOB、一般の人の協力を強く要望する。というのは、この所の本校の野球応援は統制のなさが指摘されている。これは応援部の無力の致すところであるかもしれないが、それと共に、いやそれ以上に一般の協力が必要であるということをわかって欲しい。各自がバラバラな事を叫んでも選手の耳には届かない。それが、観客全員が一斉に励ましを投げれば、どうだろう。その声援は高々の選手を元気付けるのみならず、敵の選手をも脅す巨大な「力」となる筈である。

正に、観客が、応援が、試合の勝敗を決するという事と、その応援には統制が必要であり、統制とは、高々生一人一人の協力そのものに外ならないという事を忘れないで欲しい。

では、以上を踏まえて、応援団は一層の修練を誓うと共に、部員以外の皆も高々勝利に尽くそうではないか。

克己
バレー部
有阪　隆志

僕達バレー部は、現在はっきりとした波を持っています。僕達が波に乗ったときなどは、いつもの僕達からは想像の出来ないほどの力を出しますが、波に乗り損ねると何もかもがちぐはぐになってしまい、まさに弱体という言葉が当てはまります。ではなぜそのようになってしまうのか、それは一人ひとりの立場の自覚が欠けているのだと思います。一人ひとりがその気になってプレーしなければいくら他人から言われてもだめなのです。

僕達は今、自分自身のためにバレーをやっているのです。自分自身のどういうことのためかということはうまく言い表せないほど複雑なものです。

ではこれから僕たちバレー部に必要なものとは何でしょうか、それは己に勝つ心、まさしく「克己」なのです。この克己の精神を一人ひとりがもちチーム一丸となって、今度の大会へ臨めば決して優勝も夢ではないはずです。

空手部の伝統
空手道部
加藤　康一

ここ数年前に正式な部となった空手道部はまさにこれから伝統を作っていこうという高々では珍しい部の一つである。しかし先輩達の残してくれた成績は素晴らしく、部員全員がそれを上回るようわずかな時間ながら毎日練習を積んでいる。そして現在部員数は三十七名、そしてその内七名が有段者と、大変活発になってきている。昨年では個人戦ながら関東大会出場の夢もかない、県内でも次第にその頭角を表してきている。しかし今年になって昨年まで顧問をなさっていた鹿野福次先生が中央高へ転勤してしまい、技術指導を受ける先生がいなくなってしまった。その動揺のせいか、総体では一回戦敗退というこれまでにない屈辱的な負け方を強いられ、名・実ともに一からの出直しとなってしまった。これからも生徒だけの短い練習がしばらく続くわけだが、それはそれで高々らしくていいと思う。他校のように顧問が強制的に長時間やらせる部活なんかより、よっぽどやりがいがあるし、それに新顧問である井上・飯野両先生も良く面倒をみて下さり、何よりも部員のやる気があるのだからこれ以上のことはない。

とにかく充実した練習から良い結果が生まれ、それが高々空手道部の伝統の一ページとなるように部員一丸となって頑張ろうと思う。

昭和62～63年度 高々運動部活動状況

◇サッカー部
選手権予選
西毛一次リーグ
・Bグループ　1位
代表決定戦
高々　1－2　富岡
第23回県総体
高々　4－0　前西　（1回戦）
高々　1－1　農二
（PK2－0）（2回戦）
高々　0－1　太東　（3回戦）

◇柔道部
第23回県総体
（団体）
高々　4－1　渋工　（1回戦）
高々　0－4　利根商（2回戦）
（個人）
清塚　（1回戦）
長谷川（2回戦）
丸橋　（3回戦）

◇山岳部
第23回県総体兼第32回関東予選
男子総合　7位
（関東大会出場）

◇軟式庭球部
第23回県総体
（団体）
・高々　3－0　佐波農　（2回戦）
・高々　1－2　太田　（3回戦）
（個人）
・織茂・宮田1－4太工　（5回戦）
・岡部・岩田2－4前商　（5回戦）

◇陸上部
第23回県総体
・三段跳　岸　裕司　4位
・110MH　因　直輝　6位
第40回学校対抗
・三段跳　岸　裕司　5位
・走高跳　岸　裕司　3位
・110MH　因　直輝　3位
・三千MSC　茂原賢三　2位
・千五百M　秋永成信　6位
・4×100MR　5位
新人大会
・五千M　茂原賢三　1位
・110MH　因　直輝　3位
・三千MSC　茂原賢三　4位
・棒高跳　鈴木史郎　6位
・4×100MR　5位

◇剣道部
第23回県総体
高々　3－2　利根商　（3回戦）
高々　0－5　農二　（4回戦）

◇野球部
第70回全国高校野球県大会
高々　9－0　富岡実　（1回戦）
高々　0－4　太田工　（2回戦）

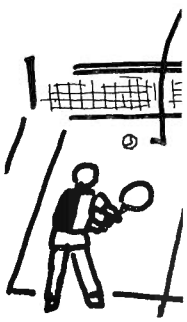
◇卓球部
第23回県総体
（団体戦）
高々　3－0　桐商　（1回戦）
高々　3－0　安中　（2回戦）
高々　2－3　館林商　（3回戦）

◇バレー部
団体予選

高々　1－2　高崎北
竹田杯
高々　2－0　佐波農
高々　2－0　藤岡
高々　2－0　伊勢崎東
高々　1－2　高商
春季大会
高々　2－0　吉井
高々　2－0　育英
高々　0－2　桐高
第23回県総体
高々　2－0　太田　（2回戦）
高々　0－2　高商　ベスト8

◇空手道部
第23回県総体
（団体組手）
高々　2－3　新田　（1回戦）
（個人組手）
加藤　1－2　伊勢崎工（4回戦）

◇硬式テニス部
第23回県総体
高々　2－1　桐商
（1回戦）
高々　2－1　藤高
（2回戦）
高々　0－3　新島
（ベスト8・3回戦）



翠巒体育会役員名簿（昭六三・一〇・六）

	氏名	回	住所	電話	学校側顧問
会長	岩田武雄	53			学校長 磯貝福七
副会長（事業）	山口正敏	58			教頭 塩浦徳三郎
〃（事業）	秋池宗一郎	65			運動部長 清水敏男
〃（事業）	川手義昭	62			
〃（庶務）	横田茂	55			
〃（庶務）	塚越章司	58			
〃（庶務）	木村洋	59			
〃（書記）	小沢武男	57			
〃（書記）	東瀬朝紀	69			
〃（会計）	佐藤義夫	58			
〃（会計）	安中隆一	65			
〃（会計）	丸山功一	60			
会計監査	廣田誠四郎	64			
〃	國峯善次郎	50			
顧問	清水貞保	30			
〃	岡田由重				
理事	竹内成幸	59			
陸上	横尾信男	65			
卓球	深沢昇	57			
卓球	根岸博昭	68			
軟式庭球	丸山博	68			
軟式庭球	木村芳之	72			
バスケット	反町定夫	50			
バスケット	友松敬三	61			
バレー	林章	67			
バレー	下村幹貢	62			
ラグビー	安部基彦	73			
ラグビー	深沢岩吉	52			
ラグビー	設楽嘉男	57			
サッカー	赤羽英光	73			
サッカー	原清野哲雄	74			
サッカー	小此木勝弘	78			
水泳	小茂田勝猛	56			
水泳	関口茂樹	66			
柔道	石井清一	57			
柔道	吉野宏一	63			
剣道	岩井寿史				
剣道	武井茂雄				
剣道	井本嘉宣				
剣道	児島修				
剣道	安茂				
剣道	小笠原祐治				
剣道	徳				
剣道	清水敏男				
剣道	今井俊治				
剣道	大山勝男				
剣道	茂木道弘				
剣道	川嶋尚武				
剣道	田多澄男				
剣道	塚田元樹				
剣道	生形優				
剣道	矢島哲雄				
剣道	富田裕二				
剣道	波戸場研二				
剣道	森慶寿				
剣道	原田光男				
剣道	服部潤				
剣道	飯塚光				
剣道	富田裕二				
剣道	山本昭弘				
剣道	増田泰				
剣道	寺町良次				
剣道	岡田豊治				
剣道	小笠原祐治				
剣道	上野臣吾				

	氏名	回	住所	電話	学校側顧問
剣道	林茂	68			篠原正泰
剣道	藤木正行	69			大森威宏
剣道	浅名誠	70			※休部中
登山	清水正爾	55			田端穣
体操	森忠義	59			小林俊之
野球	田安平	46			池之上昭義
野球	井上均	70			石沢信久
野球	小山潤一郎	77			島田要
野球	小林				矢島哲雄
応援	荒木厚生	60			斎藤隆
応援	秋山賢治	74			船戸秀道
硬式庭球					五十嵐誠一
弓道					染谷秀雄
スキー・スケート					西須秀夫
空手道					大山善文
					高橋寛
					真砂芳夫
					佐藤熙
					中島國雄
					富田裕二
					岩井寿史
					井上健郎
					飯野良二
編集部編集部長	田中大崎哲彰	77 50			
事務局事務局長	富田裕二	76			富沢栄世
	川嶋尚武	60			富田一仁
	原田光男	49			
	小林俊之	49			

編集後記

岩田会長の下での一期二年が過ぎ、増増充実の二期目を迎えます。役員体制も大巾に刷新され、加えて念願でありました体育会の会員名簿が発行の運びとなり、私達編集部も忙しい毎日でした。折しも時はソウルオリンピック真最中です。世界中が熱狂するこの大イベントに、高高の後輩を送り出したい。とは、我々OB全員の願いではないでしょうか。

翠巒体育　第十号
昭和63年10月6日発行
翠巒体育会事務局
〒三七〇　高崎市八千代町二―四―一
群馬県立高崎高等学校内
電話　〇二七三（二四）〇〇七四
印刷　㈲オーサキ